

シフトテクノロジージャパン

テクノロジー進化の面から保険業界の未来を考えるセミナー DXの先端領域知る専門家が知見共有

シフトテクノロジージャパンは7月6日、東京都千代田区の丸ビルホールで保険業界のリーダー層を対象にしたセミナー「テクノロジーの進化と保険の未来」を開催した。当日は保険業務におけるAIなどの先端テクノロジーの活用事例や、進化するテクノロジーとの関わりについて、日本アイ・ビー・エムのアーキテクトや、大手生損保のDX推進担当者などが専門的知見から解説。当日は保険業界関係者など合計100人強が参加した。

いづらシステムはユーザーから見向きもされない部分があるため、デザイン面のアプローチを含めてCXの優位性を確保すること、また、スマホやタブレット、さまざまなクラウドといったマルチデバイスへの対応、チャネル追加等への迅速な対応力が重要になるとの見解を示した。



多くの保険業界関係者が参加した

思決定をサポートできるAI製品を作ったことが挙げられる」と強調した。

続けて、AIは創業当初、主に不正請求検知の分野で活用されていたが、今は保険引受け時のリスク分析など、保険会社の幅広い分野における意思決定に生かされていると紹介した。また、生成AIのユースケースは医療記録や要求書などの要約、調査関連文書の作成、保険金担当者のメモ、警察報告書、供述書などの情報源に基づくビジネスの裏付けなど多岐にわたると説明し、そのテストケースとして、94ページに及ぶ交通事故レポートをわずか数秒で処理した事例について解説した。

次に、損保会社からの海上グループがデジタル戦略において、新たな成長の軸を創出する「価値提供の変革」、生産性を高める「社内体制の変革」、データ基盤の構築に強みを持つPKSH A Technology社との共同出資により、新会社Aigonautを設立したことを報告した。

同氏は、これまでの常識を覆すような社会変化が次々と起るVUCAの時代では、AIがこの先、どの分野で、どのような影響を与えていくのか具体的なイメージがつかみにくいとした上で、システム開発にはこれまでのウォーターフォール型ではなく、少しずつ仮説を検証しながら作り上げる仮説検証型プロジェクトを取り入れるべきだと提唱し、第一生命では、仮説検証型プロジェクトを実現する体制として、21年10月に「アジアイル工房」をローンチしたと述べた。

冒頭、同社で日本事業を統括するビジネス・デベロップメント・ディレクターの小出周作氏は、同社の事業概要について説明し、「AIで保険会社の意思決定を自動化し、最適化することがわれわれの役割」と述べた上で、同社の差別化要因として、AIを含めた最先端の「技術」、100%保険業界にフォーカスする「ドメインナレッジ」、200人以上の規模のデータサイエンスチームを有する「テクノロジー人材」の三つを掲げ、これらを強みにグローバルの保険会社をサポートしているを紹介した。

続いて市村氏が登壇し、先進ITで描く世界ー保険編からDXアプローチと題して、CXの優位性を確保において最も重要なフロント・サービスのモダナイゼーションや、業務効率化につながるプロセス・マイニング等に関する同社のサービスについて説明した。

続いて市村氏が登壇し、保険会社における業務効率化には「可視化」と「継続改善」が必要であり、そのための手段として同社が用いているプロセス・マイニングについて説明した。

既存システムのログを活用できることやSaaSで提供されることにより、投資の抑制が可能になる、といったメリットを説明し、この技術は現

る生成AIの保険適用アプローチについて講演した。

同氏は自身が保険ビジネスに興味を持つようになったきっかけや、シフトテクノロジーの業績に

ついて、現在、世界に顧客が120社以上いること、保険契約や請求の分析実績が26億件以上であることを説明した。

最後に、仮説検証型プロジェクトについて、開発を外注する必要も、予算取りのための開発会議も必要なく、全てチームメンバーでできるため、「開発プロセスではなく働き方である」との見解を示した上で、「事業部とIT関連部署が共に連携して取り組むべき」と結んだ。

仏本社創業者、ジャウイッシュ氏も登壇

在、保険会社社長の保全業務に利用されていると説明した。

次に、シフトテクノロジーのCEO兼共同創業者のジェレミー・ジャウイッシュ氏が登壇し、シフトテクノロジーが考

特別ゲストとして、東京海上ホールディングスグループCEOの生田目雅史氏が登壇し、「Digital Shift for Future Society」と題して講演を行った。

同氏ははじめに、東京海上グループがデジタル戦略において、新たな成長の軸を創出する「価値提供の変革」、生産性を高める「社内体制の変革」、データ基盤の構築に強みを持つPKSH A Technology社との共同出資により、新会社Aigonautを設立したことを報告した。

同氏は、これまでの常識を覆すような社会変化が次々と起るVUCAの時代では、AIがこの先、どの分野で、どのような影響を与えていくのか具体的なイメージがつかみにくいとした上で、システム開発にはこれまでのウォーターフォール型ではなく、少しずつ仮説を検証しながら作り上げる仮説検証型プロジェクトを取り入れるべきだと提唱し、第一生命では、仮説検証型プロジェクトを実現する体制として、21年10月に「アジアイル工房」をローンチしたと述べた。

最後に、仮説検証型プロジェクトについて、開発を外注する必要も、予算取りのための開発会議も必要なく、全てチームメンバーでできるため、「開発プロセスではなく働き方である」との見解を示した上で、「事業部とIT関連部署が共に連携して取り組むべき」と結んだ。



小出氏



河野氏



市村氏



ジャウイッシュ氏



生田目氏



江口氏